

博物館展示のこれからのあり方

後藤 道治¹⁾・高橋 啓一²⁾

1. はじめに

展示事業は博物館活動の大きな柱の一つである。資料収集や調査研究が博物館の根幹を支える事業であり、展示はその根幹事業に支えられながらディスプレイされる。また展示は博物館の主張が直に観客に伝わる事業と言える。さらに、博物館における科学教育の普及にとって特に重要な役割を果たしている。

展示活動に対する考え方や展示手法は、大学博物館や地域の博物館などその種類や性格によって違いが生じるので、ここでは地域の博物館を中心に考えていきたい。

さて、近年多くの博物館では、展示内容の水準、地方と中央の展示評価、展示予算、さらには学校教育との関係などに諸問題を抱えているのが現状である。しかし、この諸問題をつきつめて考えてみると、良い展示とは何かということが、学芸員を含む博物館職員全体に問われているような気がする。また、筆者らも含め多くの学芸員が、良い展示とは何かを模索しながらも方法論に終始し、その本質を明確に把握し切れていない現状があるように思われる。ここでは、展示の本質やその根幹とは何か、何をよりどころとして展示を進めていけば良い展示ができるのかについて、考えてみたい。

2. 展示における「もの」とは何か

展示の目的の大筋は、観客に自然界の法則性や自然現象の原因などの自然に関する知識を伝え、探求心をおこさしめ、さらには観客自らが自然とふ

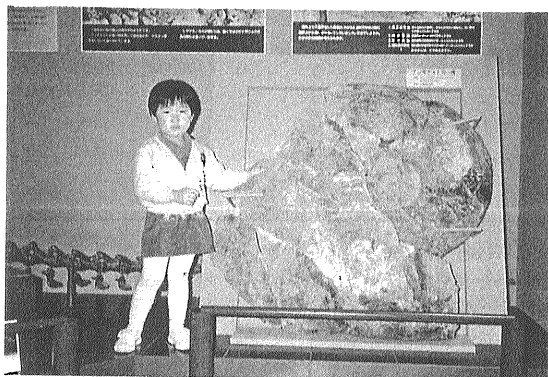
れあいながら自然観を培うための機会を提供することにあると思われる。

このことは、科学教育の普及の一環であり、学校教育の場でも行われていることである。では、博物館と学校との違いはどこにあるのだろうか。

アンモナイトを例にとると、学校教育では、アンモナイトの形態的特徴、生存年代、進化学的考察などについて、文字あるいは言語で説明され、アンモナイトの知識が生徒や学生に伝えられる。つまり、伝達手段が文字や言語なのである。

一方、博物館においては文字や言語と言うよりはむしろ「もの」が中心となってくる。色彩や形態や表面の美しい「シダ模様(=縫合線)」から起こる様々な疑問について、観客は知りたがろうとするし、化石に触れたときの石の温度や凹凸の感触に驚きを感じたり関心を示す。つまり「もの」から感じられる直接情報に興味を持つのである。

このことについて石坂(1994a,b)は、学校教育の



第1図 富山市科学文化センター自然史展示室内の巨大アンモナイト。実物は可能な限り触れられるように置いている。

1) 福井県立博物館:

〒910-0016 福井県福井市大宮2-19-15

2) 滋賀県立琵琶湖博物館

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091番地

キーワード: 博物館, 展示, 啓発活動, 非言語的身体感覚

場では教科書などの言語による理解の方法に重きが置かれ、標本などの「もの」は、理解のための補助的な手段として用いられる傾向が強いが、博物館においては展示物から出る主観的で感性的、非言語的身体感覚が重要視される傾向が強く、言語はむしろ補助的なものであり、身体感覚への刺激によって起こる「もの」の認識の欲求に対して、はじめて言語が手段の一つとして使用されるとしている。

このように展示における「もの」が主観的で感性的、非言語的性格を示す傾向が強いととらえられるならば、学芸員はそのことをよく考えた上で、コーナーや「もの」の配置、色などのディスプレイ、展示解説などの展示構成を考える必要がある。また、「もの」の認識には視覚を中心とした五感をフルに活用した方法を駆使し、その刺激によって湧き起こるであろう観客の知的欲求を予測して、それを満足させる言語的補助手段を準備することが大切と考えられる。

3. 自然観を確立させる手段としての展示

「もの」の集合体である展示には、いろいろな方法があるが、時間系列にしたがって展開する方法や空間系列を重視する方法などがある。時間系列の展示は、時間を追って過去から現在に至るある一定の課題を持って展開するやり方である。この方法は、古生物の展示には比較的多く用いられ、展開がすっきりとしている。それはある意味では教科書的であり、理解しやすく感じられる。しかし、全体的に総花的になる嫌いがあるという欠点もある。一方、空間系列の展示は時間を定め、そこに広がる空間の中の自然現象を展開することになる。その場合、個々の「もの」の有機的な結びつきを理解してもらうことが重要になってくる。しかし、展示全体が実物の羅列に終わってしまった場合、観客にとって、展示の全体に流れる「もの」の有機的な結びつきを理解し難いものにしてしまうことになりかねない。

そこで、時間系列と空間系列を組み合わせ、地史の中からいくつかのポイントに重点を置き、それぞれに課題と問題視角を設定し、できるだけ詳しく、学術的・多角的に展示構成を行う一方で、余



第2図 琵琶湖博物館のディスカバーールーム。五感をつかって楽しんだり、新しい発見ができる。

計な部分は切り捨ててしまう展示を行う。この方法は、石井(1997)で述べられている国立歴史民俗博物館などの歴史系の博物館で行われている方法である。最近の自然史系博物館の古生物部門の展示展開はおおむねこのようになっているようである。

しかし、この方法で展示を展開したとしても、問題視角の設定をしっかりとっておかないと、展示自体の焦点がぼやけたり、無味乾燥的なものになりかねない。

アンモナイトを例にとると、アンモナイトはふつう平巻きが一般的であるが、一部の種類では、異常巻きといって、見るからに規則性のないような巻き方をしているものが見られる。Okamoto(1988)、岡本(1989)は、異常巻きのアンモナイトが平巻きのものとは異なった独自の規則性を持って成長していることに注目し、異常巻きの成長の規則性を数式に表し、コンピュータグラフィックスで描かせた。さらには、形態的特徴がその種類の生態的特徴を反映したものであるとしている。自然の持つ多様に驚きつつも、その着眼点と学問的に裏打ちされた切り口の鋭さには説得力がある。

このことは、展示の目的にも関わることである。展示の切り口によって、今まで見えなかったものが見えてくる世界であり、そこに観客は自然に対する驚きを感じたり、不思議さに感動するのである。また、学芸員もかつて感じた驚きや感動を観客と共有した世界がそこには広がるのではないだろうか。それが学芸員のねらいの一つと言える。

はじめに戻るが、展示の目的は、観客が自然界の法則性や自然現象の原因などを知ることによ

て自らの自然観を確立するための機会を提供することにある。つまり、展示は一つの方便ではあるけれども、その中には自然の法則性や成り立ちに関する真理が隠されているのである。したがって、啓発を受けた観客に対し、学芸員は自然観の確立にいたるまでのアプローチを支えるように、大なり小なり働きかけを忘れてはならないのではないだろうか。

4. 古生物の展示のむずかしさ

展示における「もの」の持つ本質はどの分野においても変わることはないと思うが、生物系や理工系の展示においては、現在あるいはそれに近い時代の事象を扱っているのに対し、地学系においては時間軸の認識というやっかいな問題がある。一般的に古生物の展示では、過去から現在までの生物の絶滅と進化の歴史の中で起こった事象が主なテーマとして取り上げられる。しかし、観客側には歴史的な時間感覚はかろうじて受け入れられても、地質学的な時間スケールはほとんど認識されていないと考えた方がよいと思われる。極端なことを言うと、恐竜も三葉虫も皆同じ時代の生物なのである。したがって、進化など時間の流れの中で起こる事象を観客に理解してもらうことは大変難しく、観客に対して時間の壁を取り払う配慮がどうしても必要なのである。しかし、これは経験的に思うのであるが、容易なことではない。

5. 多岐にわたる展示解説の手段

前述したように、身体的感覚でとらえられた「もの」や時間軸の存在を観客に認識させるための言語的手段が解説であり、その具体的な方法としては解説文がある。しかし、ほとんどの博物館ではその方法は解説文のみではなく、グラフィック、音声、マルチメディア、解説員・学芸員に対する問い合わせなど多岐にわたっている。その理由は不特定多数の観客を対象として展示を展開し、観客に自然の法則性やその成り立ちを時間軸という流れの中で理解してもらうためには、解説文のみでは十分まかないきれないからである。観客の生活環境や学習能力や経験が全て異なるため、その理解能力が



第3図 富山市科学文化センター自然史展示室。照葉樹林のスルージオラマの中で、展示解説をするボランティア。

異なり、理解できる媒体も多岐にわたるのである。しかし、現実的には解説員や学芸員の解説がなくても、解説文やマルチメディアによってほとんどの展示が理解されなければならないという意見もある。学芸員の業務的問題を抱えている博物館の現状を考えると、もっともなことであると思う。

しかしながら、できるだけ多くの観客に対し、自由自在な対応ができる解説員や学芸員の働きかけは将来的に注目されるとと思われる(菊池, 1997)。

ここで言う解説員や学芸員とは、単に展示における知識の伝達のみ役割を担うものではなく、不特定多数の観客に古生物をはじめとする自然の魅力や自然にふれる楽しさを伝え、最終的には観客自らが進んで自然の世界を探求しようとする意欲をかき立てる啓発活動を行う役割も担っている。その活動に携わる解説員や学芸員には、学問的な知識や質の高さはある程度あった方がよいが、むしろ解説員が持つ個性や雰囲気、経験などが重要なポイントになるようである。そのように考えると、多種多様な人材を備えているボランティア解説員を活用することも、将来にわたって考えてみる必要があるのではないだろうか。また、既にボランティア制度を導入している博物館も、ボランティアを学芸員の穴埋め的存在と捉えていないか、画一視的な対応をボランティアに対しとってはいいないか等の再確認を常に行い、活動の目的、そのコンセプト、実施内容等を再点検しつつ、進めていかなければならないと思う。

5. おわりに

博物館展示の抱える諸問題を解決する糸口には、良い展示とは何かという根本的な考え方に基づいた方法の検討が不可欠のように思われる。展示の根本的な目的と「もの」を含めた展示物の持つ本質を的確にとらえることから始まり、対象となる観客と地域の風土にあわせた展示の手段や方法を考え、さらには不特定多数の人に、自ら進んで自然観を培うことができるような啓発活動を行っていくことによって、地域に根ざした博物館の展示が将来的に展開していくことが望ましいと思われる。学芸員は良い展示を作るために悩み、模索しながらその博物館ならではの展示活動を将来にわたって行っていくことが必要と思われる。

なお、本稿は著者の一人である後藤が富山市科学文化センター在職中に執筆されたものである。

執筆にあたり、大阪市立自然史博物館の樽野博幸学芸員ならびに富山市科学文化センターの石坂雅昭博士には、多くの有益なご助言を頂いた。ここに厚くお礼申し上げる。

文 献

- 石井 進(1997)：国立歴史民俗博物館の現状と課題。博物館研究, 32,6, 21-27.
- 石坂雅昭(1994a)：展示というメディアの特徴と博物館の役割(1)。博物館研究, 29,9, 5-9.
- 石坂雅昭(1994b)：展示というメディアの特徴と博物館の役割(2)。博物館研究, 29,10, 2-5.
- 菊池健策(1997)：資料が語ることと資料を読むこと-展示の可能性-。博物館研究, 32,9, 31-35.
- Okamoto, T. (1988)：Changes in life orientation during ontogeny of some heteromorph ammonoids. *Palaeontology*, 31, 281-294.
- 岡本 隆(1989)：理論形態学の方法と展望-管状体の幾何学的記述法と静水力学的応用。化石, 46, 17-28.

GOTO Michiharu and TAKAHASHI Keiichi (1998)：Future state of Museum exhibitions.

<受付：1998年10月1日>